長岡市立阪之上小学校所蔵の角筆文献について

鈴木　恵

一、はじめに

小林虎三郎の「米百俵」の逸話で名高い長岡藩国漢学校の流れを汲む、長岡市立阪之上小学校ふるさと教室所蔵文献について、一九九七年一二月九・一五・二二日の三日間、親しく調査する機会を得た。当初の予定では、引き続いて長岡市立図書館互尊文庫・長岡市立日越小学校所蔵文献などの調査を行って、徳川時代の藩校（長岡藩校崇徳館）における角筆使用の実態を垣間見る目論見であったが、その後なかなかその機会を得ることができないまま、言わば無為に五年が経過した。しかして、現時点では未だ全体像を掴み得る段階に至ってはいないのであるが、まず本体たる阪之上小学校所蔵の角筆文献について整理し、ここに中間まとめという形でその責の一端を果たすことにしたい。

調査は、三日間とも新潟大学大学院教育学研究科学生（当時）、木山田哲也・佐野（現姓田中）百合子・菅谷内敦・鈴木（現姓倉島）庸子・濱崎裕子・古川原（現姓小金澤）佳美・山本寛ら諸氏の協力を得て行った。また、調査に際しては、殖栗敏夫教頭（当時）を始めとする阪之上小学校の教職員の皆様のお手を煩わせた。右の方々に、深甚の謝意を申し上げる次第である。

二、阪之上小学校所蔵文献の概要

「阪之上小学校蔵古籍目録」[1]によれば、阪之上小学校所蔵文献のほとんどは、旧長岡藩校崇徳館から国漢学校に、更に同小学校に伝えられたものの如くである。明治以降、国漢学校・阪之上小学校は三度の火災に遭い、幾ばくかの書籍が失われたようであるが、それでも本目録には漢籍一〇二点、国書五六点が登録されている。[2]私どもの調査においてもそのほとんどの存在を確認することができたが、国書のうち『古語拾遺』（目録番号227）『八紘通誌』（同234）は遂に見出せず、巻数が揃わないものも相当数あった。

しかし、これとは別に、右「目録」への記載漏れか、あるいはその後の収蔵図書と見られる三二点が蔵されていることも判った。[3] この三二点の漢籍と国書の比は一対三一である。大半は明治以降の教科書類であるが、唯一の漢籍『書經』を含む三点は江戸時代の刊本であって、しかも「長岡藩國漢學校圖書」「長岡藩洋學校」の蔵書印が捺されていることから、国漢学校に由来する書籍であることが確認される。

何れにせよ、結果的には漢籍一〇三点・国書八五点、都合一八八点が調査対象となった。

三、発見された角筆文献

本調査によって発見された角筆文献は、全部で一三点である。次にその書誌を掲げる。配列は、徳島文理大学教授（広島大学名誉教授）小林芳規博士のもとにある「角筆文献台帳」に登録された、所謂角筆文献番号順とする。ただし、便宜的に整理上の通し番号を付した。

各文献についての記事は、「通し番号」「書名（外題を原則とする）」に引き続いて、①角筆文献番号　②阪之上小学校図書番号　③員数（冊数）　④書写または板行年時　⑤装丁　⑥寸法　⑦郭の形態　⑧外題（題簽の有無）・内題・尾題・版心記　⑨刊記・奥書　⑩古印記　⑪伝来の書入　⑫訓点の内容　⑬発見者・調査者と発見・調査年月日、を示してある。

1　史記評林　①［一三四五］　②阪之上小50-1～5　③全二四冊　④延宝二年（一六七四）刊　⑤袋綴装冊子本（朝鮮綴）　⑥縦二六・九糎×横一八・四糎　⑦単郭（一部双郭）　⑧外題・内題－史記評林（原題簽あり）、版心記－史記、尾題－なし　⑨延寳二甲寅暦仲夏吉辰／洛陽寺町通本能寺前／八尾甚四郎友春重刊　⑩「秋山」「長岡藩國漢學校圖書」の朱印　⑪なし　⑫訓点附刻（片仮名・返点・句切点・合符）、朱（書入）、角筆（句切線等）四箇所　⑬九七年一二月九日、濱崎裕子発見・調査

2　史記論文　①［一三四六］　②阪之上小54　③全二五冊　④文政八年（一八二六）刊　⑤袋綴装冊子本（明朝綴）　⑥縦二五・四糎×横一七・六糎　⑦単郭　⑧外題・内題・版心記－史記論文（原題簽あり）、尾題－なし　⑨大日本文政丙戌翻刻　⑩「長岡小學校」の朱印　⑪なし　⑫訓点附刻（句切点・右傍点・右傍圏点）、角筆（句切点）二箇所　⑬九七年一二月九日、山本寛発見・調査

3　王代一覧　①［一三四七］　②阪之上小210　③全七冊　④寛文三年（一六六三）刊　⑤袋綴装冊子本（明朝綴）　⑥縦二五・七糎×横一七・八糎　⑦単郭　⑧外題・版心記－王代一覧（原題簽あり）、内題・尾題－日本王代一覧　⑨寛文三暦癸卯孟春日／書林村上勘兵衛刊行　⑩「長岡小學校」「勝方」の朱印　⑪なし　⑫漢字片仮名交じり文（ルビ・句切点・合符）、朱（行頭圏点）、墨（書入・上欄注）、角筆（頭揃えの直線）半丁分　⑬九七年一二月九日、佐野

百合子発見・調査

4 詩經 ①〔二三四八〕 ②阪之上小14 ③全二冊 ④江戸時代刊か ⑤袋綴装冊子本（明朝綴） ⑥縦二五・〇糎×横一八・〇糎 ⑦単郭 ⑧外題・内題・尾題・版心記－詩經（原題簽あり） ⑨なし ⑩「吟味」の黒印 ⑪表紙見返しに鉛筆による未詳墨書あり ⑫訓点附刻（片仮名・返点・句切点・合符・圏点）、角筆（片仮名か）四箇所 ⑬九七年一二月一五日、木山田哲也発見・調査

5 禮記 ①〔二三四九〕 ②阪之上小23 ③全四冊 ④文久三年（一八六三）刊 ⑤袋綴装冊子本（明朝綴） ⑥縦二四・九糎×横一七・八糎 ⑦単郭 ⑧外題－〈改正音訓〉禮記（原題簽あり）、内題・尾題－禮記、版心記－校正音訓禮記 ⑨天明四年甲辰九月朔旦御免上梓／天明七年丁未正月元旦 發兌／文化十年癸酉正月吉旦 再刻／文政十三年庚寅正月吉旦 三刻／天保十年己亥正月吉旦 四刻／安政二年乙卯四月吉旦 五刻／文久三年癸亥八月吉旦 六刻／平安書肆 三條通柳馬場西入丁 北村四郎兵衛／東都書肆 日本橋通壹町目 須原屋茂兵衛／浪華 山内蔵板 ⑩「吟味」の黒印、「梢敬堂蔵」の朱印 ⑪なし ⑫訓点附刻（片仮名・返点・句切点・合符）、角筆（片仮名・合点・記号か）五箇所 ⑬九七年一二月一五日、鈴木恵発見・調査

6 書經 ①〔二三五〇〕 ②阪之上小33？（目録になし） ③全五冊 ④江戸時代刊か ⑤袋綴装冊子本（明朝綴） ⑥縦二五・六糎×横一七・八糎 ⑦単郭 ⑧外題－書經（原題簽あり）、内題－論語、尾題－書経、版心記－四書 ⑨なし ⑩「吟味」の黒印 ⑪「渡辺登出席届」（墨書、巻五表紙見返し） ⑫訓点附刻（返点・句切点）、墨（返点・抹消）、角筆（片仮名・句切点）三箇所 ⑬九七年一二月一五日、山本寛発見・調査

7 新刻改正四書 ①〔二三五一〕 ②阪之上小40 ③全九冊 ④安政五年（一八五八）刊 ⑤袋綴装冊子本（明朝綴） ⑥縦二五・四糎×横一七・三糎 ⑦単郭 ⑧〈第一冊〉外題－大学（題簽なし、直書）、内題・尾題・版心記－大学章句〈第二冊〉外題－中庸（原題簽あり）、内題・尾題・版心記－中庸章句〈第三～五冊〉外題・内題・尾題・版心記－論語（三・五－原題簽あり、四－題簽なし、直書）〈第六～九冊〉外題・内題・尾題－孟子（六・七・八－題簽なし、直書、九－原題簽あり）、版心記－なし ⑨寛政四年壬子初夏御免上梓／寛政六年甲寅孟春 發兌／文政三年庚辰春再刻 天保六年乙未三刻／天保十一年庚子春四刻 嘉永三年戊春五刻／安政五年戊午春正月 六刻／平安書肆 五條高倉東入丁 北村四郎兵衛／東都書肆 日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛／神田通新石丁 須原屋源助／浪華書肆 上田丁南葦屋町 炭屋五郎兵衛 ⑩「吟味」の黒印 ⑪「柳華小學校」（墨書、第七冊裏表紙見返し） ⑫訓点附刻（片仮名・返点・句切点・合符）、墨（書入）、鉛筆（片仮名・返点）、角筆（片仮名・漢字・記号）三五箇所 ⑬九七年

一二月一五日、鈴木庸子発見、鈴木庸子・菅谷内敦・濱崎裕子調査

8　文献通考　①〔二三五二〕　②阪之上小68-1～16　③全七八冊　④江戸時代刊か　⑤袋綴装冊子本（明朝綴）　⑥縦二六・〇糎×横一六・八糎　⑦単郭　⑧外題・内題・尾題・版心記－文献通考（題簽なし、直書）　⑨故相國番陽公／仲子至大戊申七月既望番／陽公門下子李謹思養吾謹／序（序文）　⑩「長岡小學校印」の朱印　⑪なし　⑫朱（右傍点・右傍圏点・上欄注・訂正・句切点・補筆）、墨（右傍圏点・上欄注・句切点・補筆）、角筆（界線）三箇所　⑬九七年一二月一五日、菅谷内敦発見・調査

9　日本外史　①〔二三五三〕　②阪之上小220　③全五冊　④明治八年（一八七五）刊か（序による）　⑤袋綴装冊子本（明朝綴）　⑥縦二二・三糎×横一五・一糎　⑦単郭　⑧外題－點注標記日本外史（原題簽あり）、内題・尾題・版心記－日本外史　⑨なし　⑩「長岡小學校印」「第六大学區新潟縣管内第三中學區公立二十番小學」の朱印　⑪なし　⑫訓点附刻（片仮名・返点・句切点・上欄注）、角筆（片仮名・漢字・記号か）四九箇所　⑬九七年一二月一五日、佐野百合子発見・調査

10　萬國公法　①〔二三五四〕　②阪之上小71　③全五冊　④元治元年（一八六四）刊か　⑤袋綴装冊子本（明朝綴）　⑥縦二五・六糎×横一七・三糎　⑦双郭　⑧外題・版心記－萬國公法（原題簽あり）、内題・尾題－なし　⑨元治甲子秋日　東都竪川三之橋　萬屋／兵四郎（裏表紙見返し）　⑩「崇德館」の朱印　⑪なし　⑫訓点附刻（片仮名・返点・句切点・注示符）、墨（上欄注）、角筆（漢字・記号か）二箇所　⑬九七年一二月二二日、古川原佳美発見・調査

11　訂正新編帝國讀本修正　①〔二三五五〕　②番号なし　③全一冊　④明治三四年（一九〇一）発行　⑤袋綴装冊子本（明朝綴）　⑥縦二二・四糎×横一四・八糎　⑦単郭　⑧外題－〈訂正〉新編帝國讀本〈修正〉（原題簽あり）、内題・尾題－なし、版心記〈修正〉帝國讀本　⑨明治三十年十月十一日發行／明治三十年十二月十八日訂正再版發行／明治三十一年九月二十七日訂正三版發行／明治三十一年十二月三日訂正四版發行／明治三十四年三月十六日修正五版發行／明治三十四年五月十七日修正六版印刷／明治三十四年五月二十日修正六版發行／編者　東京市日（以下破損、本橋區通油町拾六番地か）學（以下破損、海指針社か）」　⑩なし　⑪なし　⑫漢字仮名交じり文。平仮名・句読点附刻、墨（片仮名・漢字）、赤（平仮名・片仮名）、青（平仮名・片仮名・漢字）、紫（絵の着色）、黄、角筆（漢字・平仮名・句切線）七箇所　⑬九七年一二月二二日、鈴木恵発見・調査

12　尋常小學讀本　①〔二三五六〕　②番号なし　③全五冊　④明治二〇年（一八八七）刊　⑤袋綴装冊子本（中央ホチキス止め、製本テープによる製本）　⑥二二・二糎×横一五・〇糎　⑦双郭　⑧外題・内題・尾題・版心記－尋常小

學讀本（原題簽あり）　⑨明治二十年四月廿九日版權所有届／文部省總務局圖書課藏版　⑩なし　⑪「七信郎」（墨書・第四冊側面）、「竹沢てふ」（墨書・第三冊裏表紙見返し）、「七信郎書籍也」（鉛筆・第六冊表紙見返し）、「小池吉隆持主」（墨書・第六冊62ウ12）　⑫漢字平仮名交じり文。訓点附刻（句切点）、角筆（漢字）二箇所　⑬九七年一二月二二日、山本寛発見・調査

13　**十八史略校本**　①〔二三五七〕　②番号なし　③全一冊（二冊欠か）　④明治時代刊か　⑤袋綴装冊子本（明朝綴）　⑥縦一八・六糎×横一三・〇糎　⑦単郭（一部双郭）　⑧外題・内題・尾題・版心記＝十八史略校本（原題簽あり）　⑨なし　⑩「小島」の丸朱印　⑪「妙高村大字田切／小島常太郎」（朱書・巻一87オ）、「新井町文進堂ヨリ講求／〈訂正〉明治四拾参年壱円講求／水原村大字上小塚／明治卅七年習讀之　恩田謹次郎／中頸城郡妙高村大字田切／小島常太郎」（墨書・裏表紙）、「小島常太郎」（鉛筆書き・一オ）　⑫訓点附刻（片仮名・返点・句切点・合符・上欄注）、朱（片仮名・上欄注・抹消線）、鉛筆（漢字）、角筆（線・記号）一箇所　⑬九七年一二月二二日、濱崎裕子発見・調査

四、角筆文献の割合と書籍の分野・ジャンル

右の如く、現存資料中の一三点に角筆の書入が発見された。本節においてはこの一三点の分析結果と、新潟大学附属図書館佐野文庫悉皆調査の分析結果とを比較して、阪之上小学校所蔵文献の、角筆文献としての資料的位置づけを行いたい。[4]佐野文庫所蔵文献は、一地方の一蔵書家が、特定分野に偏重せず、各分野・ジャンルの書籍を満遍なく収集しているものであるので、これを指標として比較することによって、阪之上小学校所蔵の角筆文献の特徴を明らかにできるものと考えたからである。

そこで、まず漢籍と国書における角筆文献の割合について見ると、〈表1〉に示した通りである。すなわち、阪之上小文献では、漢籍一〇三点中の八点（七・八％）、国書八五点中の五点（五・九％）、全一八八点中の一三点（六・九％）であるのに対して、佐野文庫文献においては、漢籍八六九点中の六六点（七・六％）、国書三八九四点中の一五一点（三・九％）、全四七六三点中の二一七点（四・六％）に角筆が看取された。漢籍においてはほぼ同等であるが、国書については阪之上小文献の方が二％ほど高い数値であって、全体でも二・三％高かった。

また、漢籍における分野の内訳は、〈表2〉に掲げたように、阪之上小文献においては、経部五〇点中の四点（八・〇％）、史部二三点中の四点（一七・四％）で、子部・集部各一五点からは全く発見されないのであるが、佐野文庫文献では、経部一五五点中の六点（三・九％）、史部一三一点中の一八点（一三・七％）、子部三五六点中の二五点（七・〇％）、集部二二七点中の一七点（七・五％）の如く、史部への偏りがやや見

受けられるものの、全体的に満遍なく角筆が拾われるという結果であった。この点、両者は大きく様相を異にしているということができる。阪之上小学校所蔵文献が、そもそも経部・史部に豊富に存し、しかもそこから角筆文献が多く拾われるという状況は、藩校における学問の一端を如実に反映しているものと推察される。

〈表1〉 ―角筆文献の割合―

	漢籍	国書	全体
阪之上小	8/103 (7.8%)	5/85 (5.9%)	13/188 (6.9%)
佐野文庫	66/869 (7.6%)	151/3894 (3.9%)	217/4763 (4.6%)

〈表2〉 ―分野の内訳―

	経	史	子	集
阪之上小	4/50 (8.0%)	4/23 (17.4%)	0/15 (0%)	0/15 (0%)
佐野文庫	6/155 (3.9%)	18/131 (13.7%)	25/356 (7.0%)	17/227 (7.5%)

五、角筆文献に施された角筆の種類と分量

角筆文献一三点にはどのような種類の角筆が、どのくらいの分量施されているかという問題は、是非とも触れておかなければならない重要事項である。漢籍・国書の違いを際立たせる、大きな要素と考えられるからである。

佐野文庫調査では、種類については、仮名・漢字などを〈文字〉、声点・節博士・拍節符号などを〈音声〉、返点・句切点・合符・傍点・傍線などを〈符号〉、絵図の下絵線・なぞり線・補助線・行揃え線などを〈絵・線〉とし、分量については、便宜的に一〇〇箇所以上を〈多量〉、五〇箇所以上一〇〇箇所未満を〈中量上〉、一〇箇所以上五〇箇所未満を〈中量下〉、五箇所以上一〇箇所未満を〈少量上〉、五箇所未満を〈少量下〉と規定したので、今回も全く同じ基準を用いて分析した。その結果は、〈表3〉〈表4〉に掲げた通りである。なお、〈表4〉における分子の和は、二種類以上の角筆が施されている資料も存するため、必ずしも分母と同数ではない。

まず、〈表3〉に示した角筆の分量から見ると、阪之上小文献においては、漢籍・国書ともに〈多量〉〈中量上〉文献が全く見受けられず、漢籍では〈中量下〉文献が、第三節に示した整理上の通し番号（以下同）7『新刻改正四書』一点（一二・五%）、〈少量上〉文献が5『禮記』一点（一二・五%）、残る1・2・4・6・8・10の六点（七五・〇%）は〈少量

下〉文献で、国書では〈中量下〉文献が9『日本外史』一点（二〇・〇%）、〈少量上〉文献が11『訂正新編帝國讀本修正』一点（二〇・〇%）、他の3・12・13の三点（六〇・〇%）はやはり〈少量下〉文献であった。

これに対して、佐野文庫文献においては、漢籍では〈多量〉文献九点（一三・六%）、〈中量上〉文献二点（三・〇%）、〈中量下〉文献一六点（二四・二%）、〈少量上〉文献一〇点（一五・二%）、〈少量下〉文献二九点（四三・九%）で、国書では〈多量〉文献六点（四・〇%）、〈中量上〉文献七点（四・六%）、〈中量下〉文献二六点（一七・二%）、〈少量上〉文献一八点（一一・九%）、〈少量下〉文献九四点（六二・三%）であった。このことにより、阪之上小学校所蔵文献への角筆加点量が、極めて寡少であることが浮き彫りになる。江戸時代の藩校においては、目に触れにくい角筆すら加点を躊躇する、テキストを大変重用する雰囲気があったのではないかと憶測する。

なお、〈中量下〉文献の二点のうちの9『日本外史』は、序によれば明治八年（一八七五）の刊行と目され、11・12・13もまた明治年間の刊行である。したがって、以上の国書四点は、明治以降に加点されたもので、その後阪之上小学校の所有に帰したものであることは確実である。しかりとすれば、旧藩校時代の角筆文献の資料数とその加点の分量は、いよいよ僅少ということになる。

〈表3〉―角筆の分量―

		多量	中量上	中量下	少量上	少量下
阪之上小	漢籍	-	-	1/8 (12.5%)	1/8 (12.5%)	6/8 (75.0%)
	国書	-	-	1/5 (20.0%)	1/5 (20.0%)	3/5 (60.0%)
佐野文庫	漢籍	9/66 (13.6%)	2/66 (3.0%)	16/66 (24.2%)	10/66 (15.2%)	29/66 (43.9%)
	国書	6/151 (4.0%)	7/151 (4.6%)	26/151 (17.2%)	18/151 (11.9%)	94/151 (62.3%)

〈表4〉―角筆の種類―

		文字	音声	符号	絵・線
阪之上小	漢籍	5/8 (62.5%)	-	6/8 (75.0%)	1/8 (12.5%)
	国書	3/5 (60.0%)	-	3/5 (60.0%)	2/5 (40.0%)
佐野文庫	漢籍	24/66 (31.6%)	3/66 (3.9%)	41/66 (53.9%)	8/66 (10.5%)
	国書	40/151 (26.5%)	10/151 (6.6%)	72/151 (47.7%)	64/151 (42.4%)

次に、〈表4〉に示した角筆の種類から分析すると、阪之上小文献においては、漢籍では〈文字〉が4・5・6・7・10の五点（六二・五%）、〈符号〉が1・2・5・6・7・10の六点（七五・〇%）、〈絵・線〉が8の一点（一二・五%）

で、国書では〈文字〉が9・11・12の三点（六〇・〇％）、〈符号〉が9・11・13の三点（六〇・〇％）、〈絵・線〉が3・13の二点（四〇・〇％）であって、漢籍・国書ともに〈音声〉を表す記号は皆無であった。

これに対して、佐野文庫においては、漢籍では〈文字〉が二四点（三一・六％）、〈音声〉が三点（三・九％）、〈符号〉が四一点（五三・九％）、〈絵・線〉が八点（一〇・五％）で、国書では〈文字〉が四〇点（二六・五％）、〈音声〉が一〇点（六・六％）、〈符号〉が七二点（四七・七％）、〈絵・線〉が六四点（四二・四％）であって、漢籍・国書ともに〈音声〉を表す記号が少なからず拾われるという相違が認められた。

右は、阪之上小文献の方が佐野文庫文献よりも〈文字〉〈符号〉により偏重しており、角筆の種類にヴァリエーションが乏しく、極めてシンプルであることを表しているようである。なお、佐野文庫文献で〈音声〉が看取されるものの多くは国書であって、しかも歌謡・楽舞などを中心とした趣味・遊芸・実用の書の類であった。阪之上小文献に〈音声〉が皆無であるのは、あるいは阪之上小学校にそもそもその類の文献が全く蔵されていないという、資料的な問題が主たる要因としてあるものと推察される。[5]

なお、筆者は佐野文庫文献の中に、新潟県の方言音の特徴のひとつであるところの、イとエの混同が顕現しているものとして、漢字音では『古學二千文』の「攖譴」（7ウ1、本来「エイケン」）に「イヽケン」、『正信念佛偈』の「廻向」（10ウ4、本来「ヱカウ」）に「いこ」、国語音では『蒙求拾遺』の「喘」（上7オ4、本来「アヘグ」）に「アイン」、「還」（上40オ6、本来「カヘル」）に「カイル」と角筆で加点している例を指摘した。[6]何れも国書であった。

この点、阪之上小文献の角筆からは同種の書入は見出せず、イとエの混同の実態を伺い知ることはできなかったが、漢籍の7『新刻改正四書』の「賤」（巻二・35オ）に、「イヤシ」と並んで「イヨシ」（何れも上欄書入）なる訓が認められた。これが単なる誤点であるのか、あるいは方言、就中長岡周辺の方言であるのか、現時点では他に類例が見当たらず、未詳とせざるを得ない。しかし、同書は安政五年（一八五八）の刊行であるので、この角筆が幕末から明治初年にかけ、旧藩校において書き入れられた可能性も高いのではないだろうか。

六、むすびにかえて　―蔵書印と伝来の書入―

ところで、阪之上小学校所蔵文献には、第二節で述べたように、「目録」に登載されたもの（一五六点）と登載されないもの（三二点）とがあった。小論においては、両者を特に区別することなく、とりあえず等し並みに一括りにして取り扱ってきたのであるが、最後に両者がそれぞれどのような来歴を有するものであるのか、蔵書印と伝来の書入を手掛かり

にその一端を探ってみたい。

次に、これを整理した結果を示す。本来は文献名をも一々明示し、各文献ごとに如何なる蔵書印が捺され、どのような伝来の書入が存するのかについて、調書のままに提示したかったのであるが、紙幅の都合上極めて簡便な形態を採らざるを得なかった。すなわち、目録に登載されたものについては、「目録」の登録番号をアラビア数字で示し、登載されないものについては、私に付した「ア」から「ミ」に至るまでの、カタカナによる仮の文献番号で示して、文献名はすべて省略に従った。また、蔵書印による分類については、複数押印されているものが多く、その組合せも煩瑣に亘るため、蔵書印ごとに区別して示すことにした。伝来の書入についても、複数存する場合は別々に示した。ただ、目録番号順・五十音順に掲げることを原則としているので、原本の状態もある程度復元可能かと考える。

なお、角筆が発見された文献（角筆文献）は、文献番号に右傍線を付して区別してある。

I　目録に登載されたもの

〈明治以降に出版されたもの　〈漢籍〉58・101、以上二点
〈国書〉206・207・208・212・218・219・220・221・223・230・231・232・233・235・244・245、以上一六点。他は江戸時代に出版されたもの〉

〈蔵書印による分類〉

①「崇徳館」の朱印　〈漢籍〉71・82・83、以上三点

②「長岡藩國漢學校圖書」の朱印　〈漢籍〉11・17・18・20・21・22・24・28・29・30・31・32・43・49・50・51・56・59・62・64・77・81・84・85・86・91・92・96・97・98・99・100・254、以上三三点
〈国書〉202・203・211・215・222・224・225・236・238・243・247・248・252・253、以上一四点

③「長岡藩洋學校」の朱印　〈漢籍〉72、一点

④「長岡藩兵學校」の朱印　〈漢籍〉47・80、以上二点
〈国書〉217・241・242、以上三点

⑤「長岡小學校印」の朱印　〈漢籍〉1・2・3・5・12・16・19・25・26・32・41・42・43・46・54・55・57・60・61・65・66・67・68・69・70・73・74・75・76・78・79・83・87・88・89・93・95、以上三七点
〈国書〉200・201・210・213・214・216・217・220・223・226・228・232・237・239・240・246・251・255・256、以上一九点

⑥「新潟縣古志郡高等科長岡小學校印」の朱印
〈国書〉206、一点

⑦「第六大學區新潟縣管内第三中學區公立第二十番小學」の朱印　〈国書〉209・218・219・220・244、以上五点

⑧「新潟縣第七中學區壹小學區公立小學阪上校」の朱印
〈漢籍〉45・94、以上二点

⑨「新潟縣管内古志郡公立小學第一番阪上校」の朱印
〈漢籍〉13・15・52・53・63・101、以上六点
〈国書〉205・231・250、以上三点

⑩「新潟縣古志郡尋常科阪之上小學校印」の朱印
〈国書〉206・235、以上二点

⑪「長岡阪之上小學校圖書」の朱印　〈国書〉229、一点
⑫「長岡本町小學校圖書」の朱印　〈漢籍〉58、一点
〈国書〉212、一点
⑬「阪之上校消印」の朱印　〈漢籍〉15、一点
⑭「学校消印」の黒印　〈漢籍〉41、一点
⑮「師範学教場圖書之印」の朱印　〈漢籍〉63、一点
⑯「施政局印」の朱印　〈漢籍〉48、一点
⑰「長岡市立中學校」の朱印　〈漢籍〉77、一点
⑱その他（個人蔵書印など）
「慶宗寺藏書」　〈漢籍〉3・26、以上二点
「櫻居」　〈漢籍〉3、一点
「松下」　〈漢籍〉5・25、以上二点
「源定福」　〈漢籍〉5・25、以上二点
「植木藏書」　〈漢籍〉13・15、以上二点
〈国書〉205・250、以上二点
「吟味」　〈漢籍〉14・23・40、以上三点
「植木」　〈漢籍〉15、一点
「順」「孝」　〈漢籍〉15、一点
「師正虎印」　〈漢籍〉16、一点
「松山」　〈漢籍〉17、一点
「秋山」　〈漢籍〉17・20・24・50・85・86・96・254、以上八点
〈国書〉203・252、以上二点
「大澤藏書」　〈漢籍〉20、一点
「石川所藏」　〈漢籍〉21、一点
「梢敬堂蔵」　〈漢籍〉23、一点
「三昧」　〈漢籍〉27・44、以上二点
「榮口咸書屋」　〈漢籍〉27・44・45、以上三点
「長岡神戸」　〈漢籍〉29、一点
「大嶋義方」　〈漢籍〉32、一点
「塚越」　〈漢籍〉36、一点
「小金井」　〈漢籍〉41、一点
「酒井」　〈漢籍〉44・45、以上二点
「落合」　〈漢籍〉47、一点
「水野氏」　〈漢籍〉47、一点
「長澤藏書」　〈漢籍〉51、一点
「馬場氏藏書」　〈漢籍〉77、一点
「森氏藏書」　〈漢籍〉78、一点
「平山」　〈漢籍〉79、一点
「佐野」　〈漢籍〉95、一点　〈国書〉232、一点
「坂本」　〈国書〉207、一点
「勝方」　〈国書〉210、一点
「鶴見藏書」　〈国書〉221、一点
「松下之印」　〈国書〉233、一点
「三蘭高野圖書」　〈国書〉243・248、以上二点
「福田」　〈国書〉246、一点
※このうち個人蔵書印のみで、公的機関蔵書印が押印されないものは、〈漢籍〉14・23・27・36・40・44〈国書〉207・221・233の九点に過ぎない。

⑲蔵書印の全くないもの　〈漢籍〉4・6・7・8・9・10・33・34・35・37・38・39・90、以上一三点　〈国書〉204・208・230・245・249、以上五点

※これらは主として不揃本・残巻・零本である。

〈伝来の書入による分類〉

「渡邊登」（墨）　〈漢籍〉10、一点

「牧子草」（朱）　〈漢籍〉11、一点

「松尾蔵書」（墨）　〈漢籍〉11、一点

「順孝主」（墨、抹消）　〈漢籍〉15、一点

「時是寛政七卯春三月求之」（墨）　〈漢籍〉17、一点

「秋山左内」（墨）　〈漢籍〉17、一点

「柳華小學校」（墨）　〈漢籍〉40、一点

「齋藤徳兵衛」（墨）　〈国書〉229、一点

「高橋氏」（墨）　〈国書〉248、一点

Ⅱ　目録に登載されないもの

〈江戸時代に出版されたもの〈国書〉ク・ハ・ミ、以上三点。他は明治以降に出版されたもの〉

〈蔵書印による分類〉

①「長岡藩國漢學校圖書」の朱印　〈国書〉ハ、一点

②「長岡藩洋学校」の朱印　〈国書〉ク、一点

③「長岡小學校印」の朱印　〈国書〉サ、一点

④「新潟縣古志郡高等科長岡小學校之印」の朱印　〈国書〉タ、一点

⑤「新潟縣古志郡村立乙吉尋常小學校印」の朱印　〈国書〉ツ、一点

⑥「乙吉校印」の朱印　〈国書〉シ・ス・セ・ソ・チ、以上五点

⑦「消印」の朱印　〈国書〉タ、一点

⑧その他（個人蔵書印など）

「峯村氏」　〈国書〉イ、一点

「清」　〈国書〉イ、一点

「アマセイチユ／八木又」　〈国書〉コ、一点

「恩田」　〈国書〉ネ、一点

「吉岡氏印」　〈国書〉ノ、一点

「樋口之印」　〈国書〉フ、一点

「樋口」　〈国書〉フ、一点

「小島」　〈国書〉マ、一点

「吟味」　〈漢籍〉ミ、一点

⑨蔵書印の全くないもの　〈国書〉ア・ウ・エ・オ・カ・キ・ケ・テ・ト・ナ・ニ・ヌ・ヒ・ヘ・ホ、以上一五点

〈伝来の書入による分類〉

「宮嶋」（墨）　〈国書〉ア、一点

「宮嶋また女」（墨）　〈国書〉ア、一点

「明治七年八月求之／鼇頭日本外史獨學大全／峰村清八」（墨）　〈国書〉イ、一点

「古志郡／虫亀邨／百五拾四番地／峰村清八閲」（墨）　〈国書〉イ、一点

「北越古志郡／虫亀之村百五拾四番地／峰村氏／明治拾七

年第八月求之」（墨）　〈国書〉イ、一点
「新潟縣地理歴史初歩　成田與太郎之用書」（墨）
〈国書〉カ、一点
「明治二十八年第十月十四日／成田與太郎之求／成田與太郎之求」（墨）　〈国書〉カ、一点
「大形村字海老ヶ瀬／成田要太郎主」（墨）
〈国書〉カ、一点
「相生氏」（墨）〈国書〉ケ、一点
「越後國新潟縣官下／三嶋郡尼瀬町伊勢町／二番地平民／八木又治長男／八木徳太郎」（墨）　〈国書〉コ、一点
「乙吉小學校」（朱）　〈国書〉サ、一点
「菱澤」（墨）　〈国書〉サ、一点
「乙吉校」（朱）　〈国書〉シ・ス、以上二点
「乙吉校用」（朱）　〈国書〉シ、一点
「飯塚甚五郎」（墨）　〈国書〉テ、一点
「飯塚甚太」（鉛筆）　〈国書〉テ、一点
「長沢」（鉛筆）　〈国書〉テ、一点
「新潟縣中頸城郡長沼村／飯塚キヨ子」（墨）
〈国書〉ナ、一点
「小池吉隆」（墨）　〈国書〉ヌ、一点
「明治十六年一月求之／冨澤宗吉用」（墨）
〈国書〉フ、一点
「七信郎」（墨）　〈国書〉ホ、一点
「竹沢てふ」（墨）　〈国書〉ホ、一点
「小池吉隆持主」（墨）　〈国書〉ホ、一点
「七信郎書籍也」（鉛筆）　〈国書〉ホ、一点
「妙高村大字田切／小島常太郎」（朱）
〈国書〉マ、一点
「新井町文進堂ヨリ講求／〈訂正〉明治四拾参年壱円講求／水原村大字上小塚／明治廿七年習讀之　恩田謹次郎／中頸城郡妙高村大字田切／小嶋常太郎」（墨）
〈国書〉マ、一点
「小島常太郎」（鉛筆）　〈国書〉マ、一点
「渡辺登出席届」（墨）　〈漢籍〉ミ、一点

右により、およそ次下の諸点が明らかになった。

1、「目録」に登載された文献数は、漢籍一〇二点・国書五六点の計一五八点であるが、このうち明治以降に出版されたものは、漢籍二点・国書一六点であって、ほとんどはそれ以前（江戸時代）に出版されたものである。

2、それに対して、「目録」に登載されない文献は全部で三二点であるが、このうち江戸時代に出版されたものは僅かに三点[7]であって、残る二九点は明治以降の出版である。大半は教科書の類と見られる。

3、まず蔵書印に着目すると、「目録」に登載された文献においては、漢籍一〇二点中の八九点（八七・三％）、国書五六点中の五一点（九一・一％）の如く、かなりの高率で印記が認められる。印記の種類は、「崇徳館」「長岡藩國漢

學校」「長岡藩洋學校」「長岡藩兵學校」「長岡小學校」「新潟縣古志郡高等科長岡小學校印」「第六大學區新潟縣管内第三中學區公立第二十番小學」「新潟縣第七中學區壹小學區公立小學阪上校」「新潟縣管内古志郡公立小學第一番阪上校」「新潟縣古志郡尋常科阪之上小學校印」「長岡阪之上小學校圖書」など、長岡藩校崇徳館から阪之上小学校（長岡本町小学校を含む[8]）までの流れの中に位置づけられるものがほとんどであるが、それ以外の藏書印「師範学教場圖書之印」「施政局印」「長岡市立中學校」も僅か（三点）に看取された。複数の公的機関蔵書印が押印されたものは七点、すなわち『呂氏春秋』（目録番号83）に「崇徳館」「長岡小學校印」、『春秋左氏傳觸』（同32）・『論語』（同33）に「長岡藩國漢學校圖書」「長岡小學校印」、『小學』（同77）に「長岡藩國漢學校圖書」「長岡市立中學校」、『日本外史』（同217）に「長岡藩兵學校」「長岡小學校印」、『日本立志編』（同206）に「新潟縣古志郡高等科長岡小學校印」「新潟縣古志郡尋常科阪之上小學校印」、『清三鑑易知録』（同63）に「新潟縣管内古志郡公立小學第一番阪上校」「師範学教場圖書之印」が認められた。個人の藏書印も多く拾われるが、他の藏書印と重複して捺されたものが多い。大半は前掲の公的機関蔵書印と共に押印されたものであって、個人の藏書印のみが捺されたものは九点に過ぎない。個人のものの中では「秋山」氏が最も多く、全部で一〇点から看取された。また、印記の全くないものも一八点認められるが、多くは不揃い本で、元来は印記が存していたものと見られる。右「目録」登載文献中の角筆文献発見点数は九点である。

4、これに対して、「目録」に登載されない文献の藏書印は、三二点中の一七点（五三・一％）に見出されるが、その比率はかなり低い。印記が全く存しないものは一五点に上る。「目録」登載の文献に見られた「長岡藩國漢學校圖書」「長岡藩洋學校」「長岡小學校印」「新潟縣古志郡高等科長岡小學校之印」は少なく、それぞれ一点ずつに過ぎなかった。とりわけ「崇徳館」の印記は全く見出せなかった。逆に、前者からは一点も発見されなかった、外部の古志郡乙吉村立乙吉小学校[9]の所蔵であったことを示す「新潟縣古志郡村立乙吉尋常小學校印」「乙吉校印」の如き印記が、合計六点に看取された。個人藏書印（九種）のうち、前者と重なるものは「吟味」の黒印一種のみだった。偶然の一致かもしれないが、「吟味」の黒印が認められた四点は何れも漢籍であって、すべてから角筆が発見された。「目録」に登載されない文献中の角筆文献発見点数は、この四点である。

5、伝来の書入に着目すると、「目録」に登載されたものには書入が少ない。ただ、『詩經』（目録番号17）には「時是寛政七卯春三月求之」「秋山左内」の如くに墨書の書入が存し、更に「秋山」氏の藏書印と共に「長岡藩國漢學校圖書」の朱印が捺されていることにより、同資料が長岡藩士

と目される秋山左内が寛政七年（一七九五）三月に購入し、その後国漢学校の所有に帰したものであることが明かである。

6、これに対して、「目録」に登載されないものからは、先述の乙吉小学校の所蔵であったことを表す「乙吉小學校」「乙吉校」「乙吉校用」の朱書が見出されるほか、中越の古志郡・三島郡などを中心に、上越の中頸城郡、遠くは下越の大形村海老ヶ瀬（現新潟市）に居住する一般人の手にあった文献までもが、幅広く収蔵されていることが判った。

以上を要するに、「目録」に登載されたものは、旧長岡藩から伝わる文献や、それと深く関わる文献を中核としているのに対して、「目録」に登載されないものは、大部分が周辺から後々収集したもので、「目録」作成後に阪之上小学校に所蔵されるに至ったものであることが知られた。（したがって、より厳密に、来歴を重視した考察を行うとすれば、両者は区別して、より細分化して取り扱う必要があるかもしれない。）

しかしながら、角筆文献の発見比率は、「目録」に登載されたものが一五六点中の九点（五・八％）であるのに対して、登載されないものは三二点中の四点（一二・五％）に上り、後者の方が二倍以上の高率であった。このことから、長岡を中心とした中越地域においては、江戸時代から明治時代まで、武士階級から一般の庶民に至るまで、広汎に角筆を使用したことは明かである。就中、明治二〇年（一八八七）刊の『尋常小學讀本』（仮番号ホ）や、同三四年（一九〇一）刊の『訂正新編帝國讀本修正』（同ヘ）から角筆が発見されたことに徴して、おそらく民間人の手によって、明治の半ば過ぎまで角筆による加点・書入が行われたことが窺い知られる。

注

（1）今井元彦等編「漢籍整理と研究」第四号、九四年二月二〇日。

（2）「目録」の分類に従えば、漢籍一〇一点、国書五三点、補遺四点、合計一五八点が登録されていることになるが、序文には「今回この目録におさめた書物の総数」は「漢籍一〇一点」と「国書五四点」と記載されていて、数値に若干の齟齬が見られる。

（3）「目録」編者の漢籍研究会による調査は、九〇年九月二九日から始まり九三年四月二日に完了するまで、合計九日間を要したようである。その最終日は私どもの調査の僅か四年八ヶ月前であるので、三二点がその後の収蔵図書とすれば、この間に新たに持ち込まれたことになる。ただ、殖栗教頭（当時）の直話では、その間の事情については阪之上小学校は全く関知していないとのことであったので、残念ながら詳細は未明とせざるを得ない。

（4）拙稿「角筆文献発掘調査研究の指針を求めて―新潟大

学附属図書館佐野文庫悉皆調査―」（平成九～一一年度文部科学省科学研究費・研究成果報告書）二〇〇〇年三月一日。

（5）注（4）文献、一九九～二〇〇頁参照。

（6）注（4）文献、二〇〇頁、および「佐野文庫の角筆文献―『古學二千文』を資料として（上）（下）―」（「新潟大学図書館だより」八四・八五号、九九年三月三一日、七月一二日）参照。

（7）仮番号ク・ハについては、刊記により江戸時代に出版されたことが確実である。ミは推定による。

（8）阪之上小学校は、国漢学校から長岡小学校など様々な名称を経て阪之上小学校となり、明治二五年（一八九二）に一旦長岡本町小学校と改称された後、明治三四年（一九〇一）に長岡阪之上尋常高等小学校、明治三九年（一九〇六）に長岡市立阪之上小学校となった。

（9）乙吉小学校は、昭和五四年（一九七九）長岡市立浦瀬小学校に統合された。

［後記］

本稿は、一九九八年八月一一日に広島大学文学部において開催された角筆研究会において報告した内容に基づき、大幅に加除・訂正を行って稿を成したものである。

大橋勝男先生の退官記念号の今号には、当初は本来の専門であるところの、和化漢文に関するものを投稿する予定であったが、昨秋以降我が家にアクシデントがうち続いたために時間的余裕がなくなり、急遽第二の専門たる角筆に関する小論に差し替えることとなった。結果、大橋先生のご専門である新潟県の方言に、僅かに微かに触れる内容となったことは、怪我の功名であったかもしれない。

大橋先生の今後とも変わらぬご厚誼と、大方の御批正を切にお願い申し上げる次第である。

（二〇〇三年一月一五日成稿）

（新潟大学教育人間科学部）

新大国語（第二十八号）要目

内包語彙とその意味範囲……渡辺富美雄
「ゼブラ(Zebra)」（ハイム・ポトク Chaim Potok）の世界……三村　孝志
表現から見た『大鏡』作者の位置（一）……五十嵐正子
―係り結び「こそ」の使用から―
鷗外・荷風の史伝の月をめぐって……清田　文武
三島由紀夫『仮面の告白』の考察……阿部　孝子
―園子とウンディーネ
夢の物語とファンタジー……堀　竜一
―ようこそ大学の先生、―